

## 別府大学美学美術史（芸術文化）学科 三十周年記念に寄せて

貞 包 博 幸

(大分県立芸術文化短期大学教授)

学生のころ、九州芸術工科大学の鈴木正明先生はよくこんなことを言っておられた。東京だと一日で済むことがここだと一ヶ月はかかる、と。むろんことは福岡、つまりは地方のことであり、済むとは情報収集のことで昭和四十年代中葉頃のことである。インターネットが普及したいまでは当時とはすっかり事情が変わってしまったとは言え、研究や勉学の世界にも政治や経済その他と同様に、わが国には中央と地方とがあつて、中央に較べれば地方はとかく住みずらく、何かと不便を感じるものである。このような環境をムンク研究家の先生は当時こうした表現でしばしば語っておられたのだが、私自身大分に赴任してきて以来、ずっとこの言葉の意味を噛み締めながら今日までやってきた。

同じ頃、戦後『日本の石仏』や『白杵石仏』を一冊の書にまとめておられた谷口鉄雄先生は九大の美学美術史研究室でよくこんなことを話しておられた。先生は東洋美術、とりわけ中国の書や絵画の研究を専門としておられたのだが、原資料を用いた中国美術の研究では中国の研究者と同次元の研究ができるのだ、と。この背景には昭和四十年代当時、西欧は遠くにあつて、西洋美術の研究がいまだ西欧の研究者の研究成果に追随し、おおむねその紹介に努めていたという事情があつたからで、このような状況を踏まえて先生はこんな風に語っておられたのだろうと思う。

私自身はこうしたなかで、当時デューラーの研究者で西洋美術御担当の前川誠郎先生から研究題目として「バウハウス」なるものをちょうだいした。最初、バウハウスと聞いたときは正直言って何のことかさっぱりわからなかったが、ともかくも調べることにした。まずは研究室の向側の図書室でバウハウスに関する資料をしらみつぶしに漁ってみた。ところが意外や意外、若冠のものを除いて資料らしきものはほとんど見当たらなかった。アカデミックな研究機関であるから、きっと歴史的に価値の定まらない近・現代ものは収集されてこなかったのだろう、とそのときは思い納得していた。ちょうどそんな折に新刊紹介で一冊の本が私の目に止まった。マルセル・フランシスコノーの“Walter Gropius and the Creation of the Bauhaus, 1971”という著書であつたが、神にすがる思いで早速注文した。入手後は直ちに一行一行を丹念に読んでいった。案に違わず綿密な研究の書であることもわかった。私にとっては知らないことばかりだったが、お蔭でこの本から多くを学び教わることができた。しかも、この本には末尾にふんだんの文献目録があり、また註書きには幾多の文献資料が記されていたので我が意を得た思いでもあつた。こうして、バウハウスの姿がおぼろげながらも見えてきたし、また研究の方向もなんとか見定めることができるようになった。その後はバウハウス・アルヒーフ等への留学、度重なるヨーロッパ渡航を通して関係資料も徐々に増えていった。

こうなれば、鈴木先生が言われていた中央、地方の差は研究環境の刺激の多寡を別とすれば、縮まっていったように思えたり、谷口先生が語っておられたような、同次元とはいかないまでも西欧の研究者に近い環境だけは少しずつできていったような気もした。

九州の大学で美学美術史学科があるのはここ別府大学（現在は芸術文化学科と改称したが）と九州大学だけである。前川先生は中央と地方との違いは語学力の差だとししばしば言っておられたが、それはともあれ、九州では美学や美術史、芸術学等を専門的に学べる場は厳密にはこの二校のみである。

西欧では、芸術文化に置かれている比重はわが国に較べれば格段に大きい。二十世紀にはいつて、政治レベルでも文化立国と言われ出した今日、芸術文化を学ぶことは殊の外重要だと思われる。心に重きを置いた教育、研究の場と、日常生活において美や芸術を享受する習慣がより大切になってくるだろう。

別府大学に芸術を研究する者、芸術と社会とのあいだにあつて双方を媒介する者、専門的な芸術の技術を身につけた者等々が数多く育つことを期待せずにはおられない。

三十周年を迎え、別府大学の芸術文化学科の今後の益々の発展を祈りたい。